

^ 13
2735
3



門 八 18
號 2735
卷 3

序
天下無定名古人既

藏書印

藏書印

言之矣。今人見真景
曰如畫。見畫景曰如

藏書印
羊月

真譚。夢事曰如醒。譚
醒事曰如夢。故見毀
而增聲聞見譽而被
唾罵者不鮮焉。然則

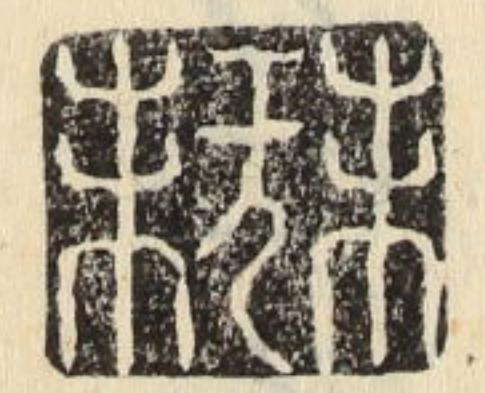
天下豈有定名乎。由
是觀之。真耶。畫耶。醒
耶。紛々毀譽固類乎
是而不足為損益焉。

此編之作者。譚浪無。

度亦何足造怨府乎

哉。大平萬年。長至日。

水鏡陳人撰。



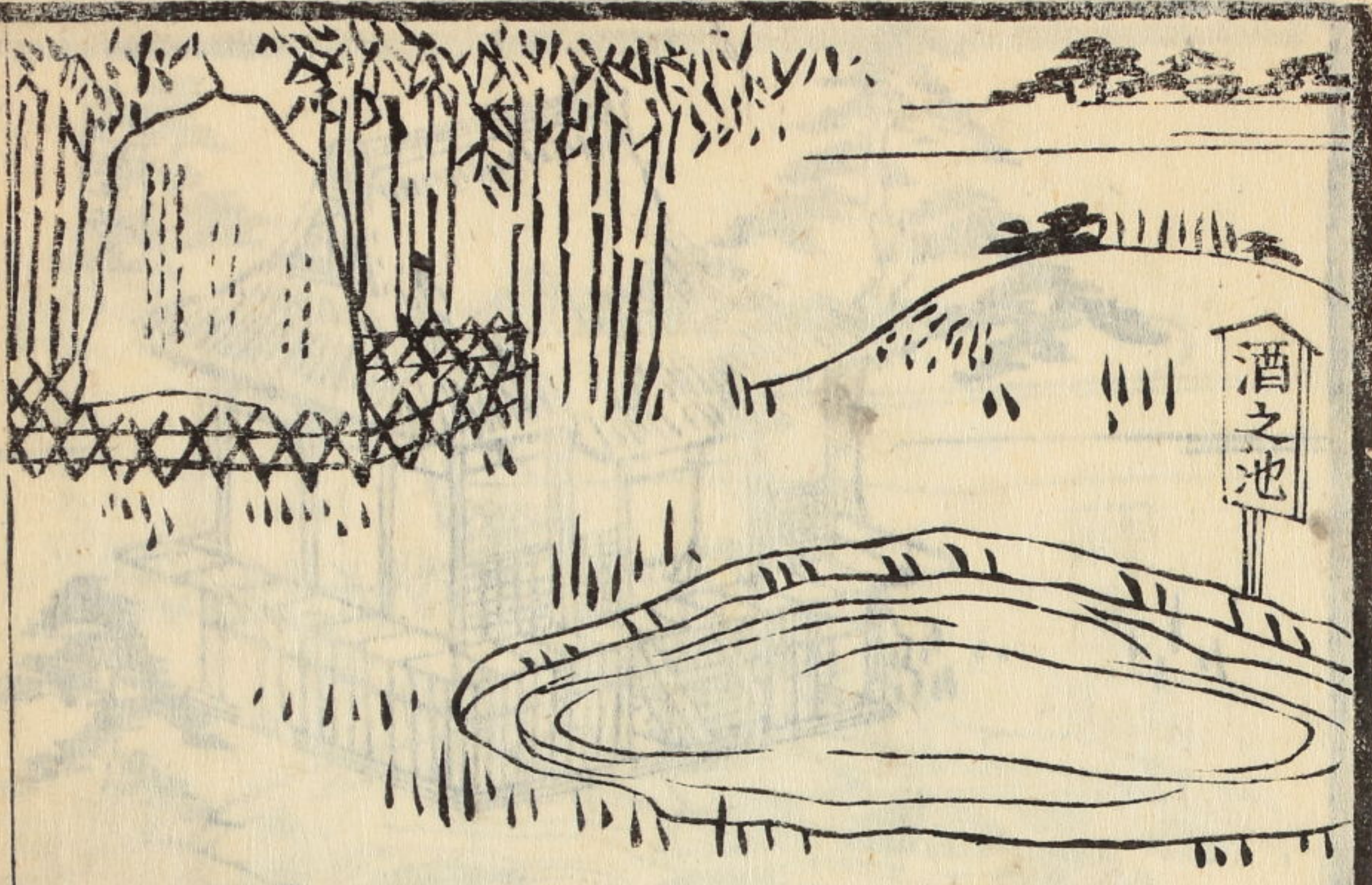
妙々奇 後夜此夢 談後編

目錄
泉岳の義談
兩國の佛談
精塔の靈談
浅艸の精談
白山の神談
矢倉の星談

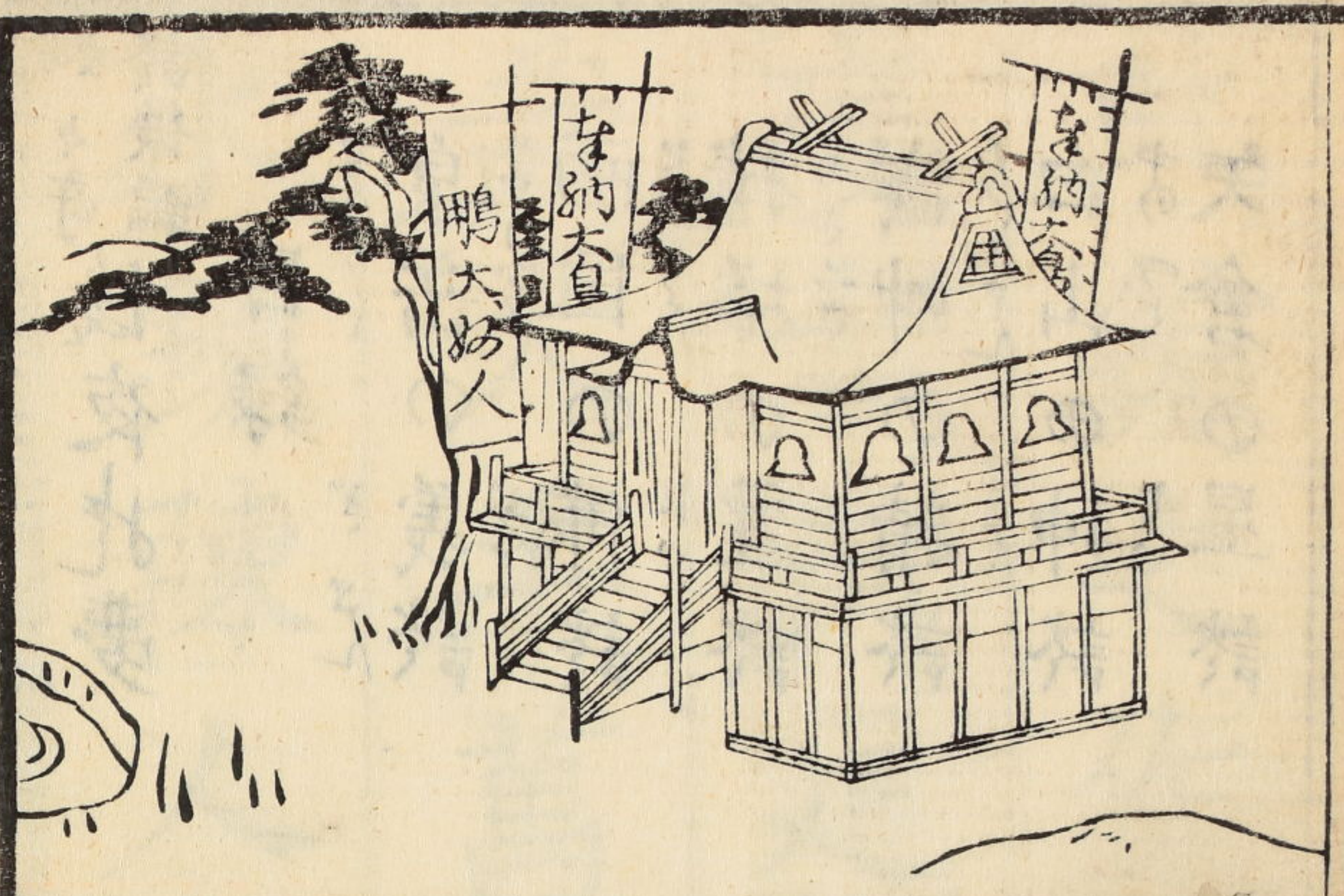
附言

水鏡山人著

此編の目錄總々。東都の地
名々々々。名所古跡の書。似
たり。因々。戯々。名所古跡の作
さよあ。そ。徳大寺の古跡を探
図記とあり。定事の附言とあり
我々。唯平波の所傳。おまをうん
少く。柳はあ。あ。代。看。あ。是
と。後。あ。あ。あ。あ。

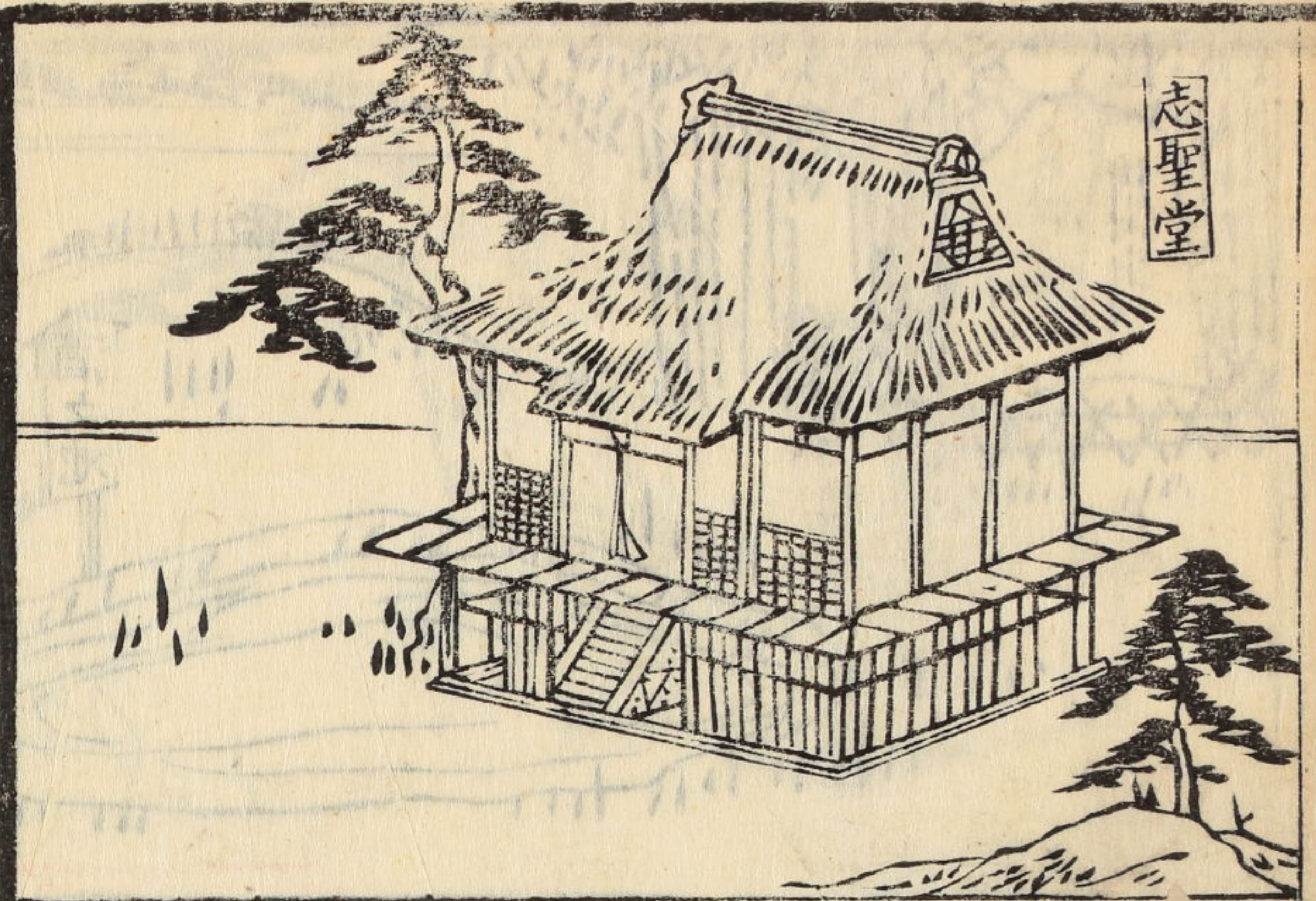


文 章 經 学 總 抛 擲
 自 許 飲 中 新 狀 元
 考 揚 酒 店 の 幸 ひ あり 酒 壺 あり 欠
 赤 筆 子 伝 言 と 連 あり 織 太 筆
 了 幼 徒 と 赫 々 々 々 神 威
 あり 深 ぬ き 碑 銘 あり 石 刻 あり
 家 美 妻 碑 入 当 社 の 名 取 あり 共
 の 知 る 亦 あり 虚 実 六 言 古 学
 孫 孫 の 珠 器 あり 子 孫 不 行 の
 並 室 あり 来 の 大 社 あり



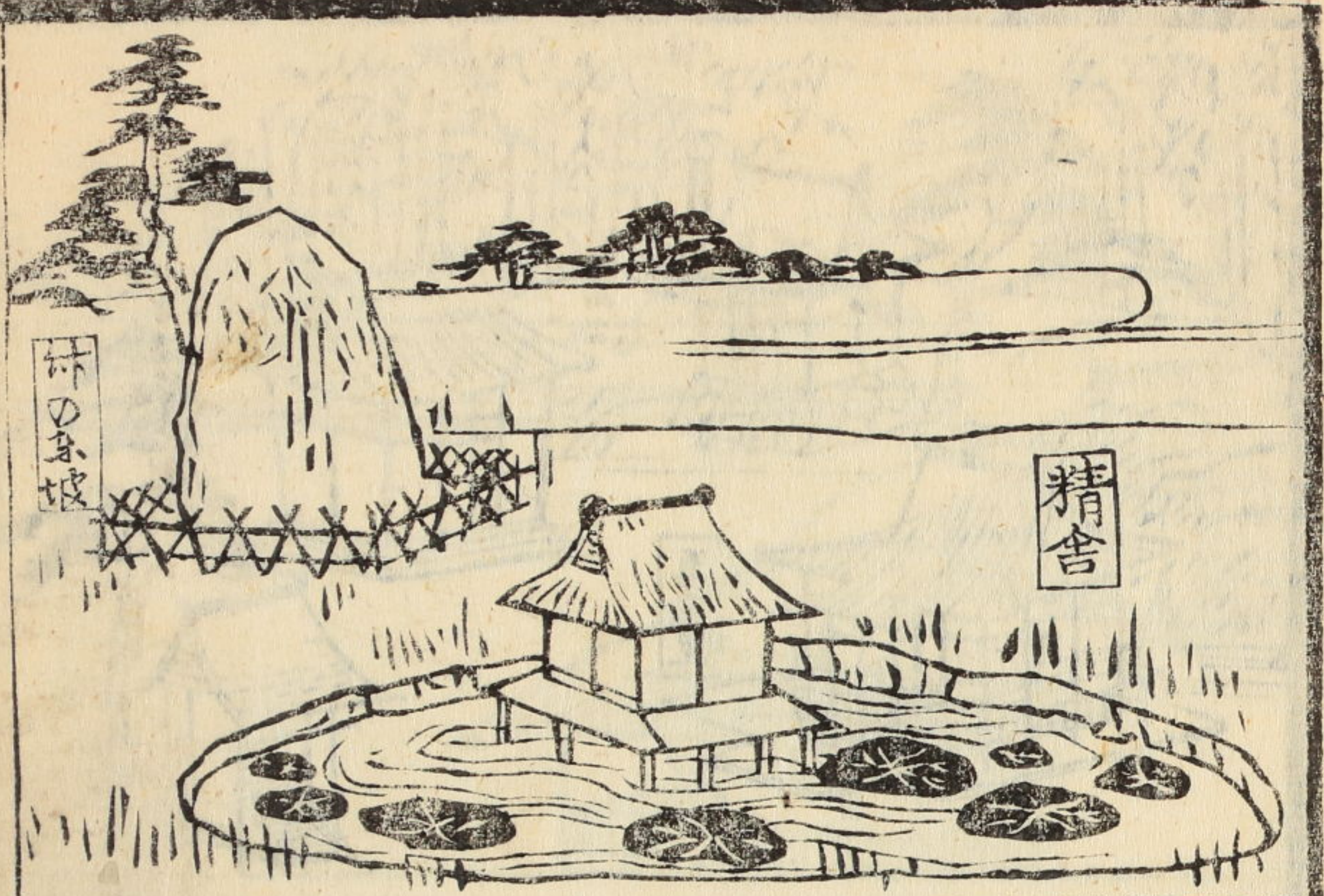
泉 岳 の 美 談
 本 社 の 大 納 言 あり 雄 鷹 の 名 を 負 び
 踏 石 の 氣 を 盡 し 嘴 の 舌 記 あり 三 尺 文
 壇 子 皇 母 一 世 と 雄 記 あり 妙 余
 世 子 嫡 孫 あり しく 冥 車 あり
 風 類 人 と 稱 本 社 の 傍 あり 佛
 堂 あり 酒 樂 經 と 納 あり 池 あり
 流 あり 當 社 の 人 靈 酒 と 吟 あり
 池 あり 流 連 痛 飲 哉 擲 を 傾 あり
 山 沢 齋 儒 不 出 門
 春 来 耽 酒 醉 寒 村

志聖堂



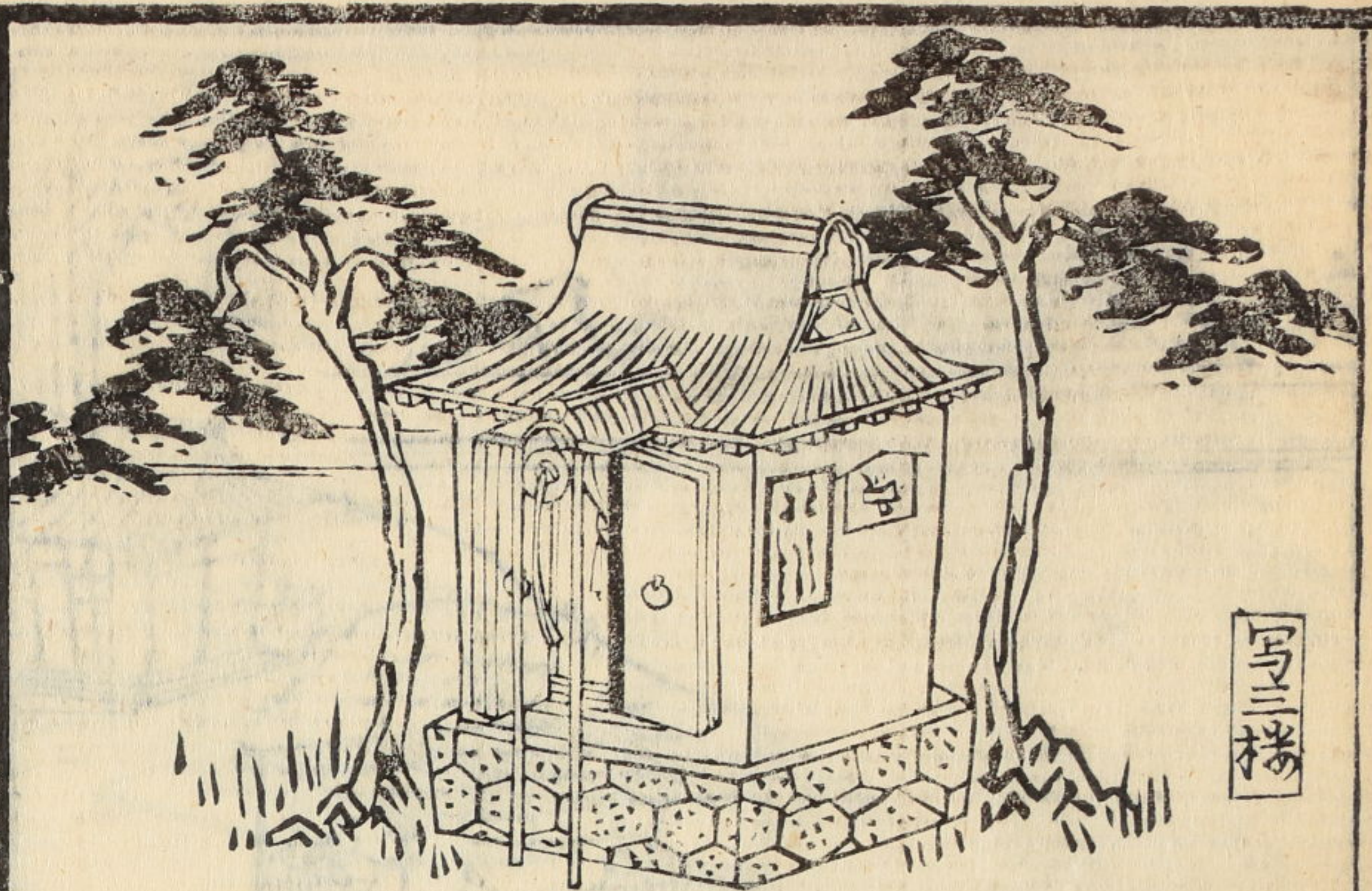
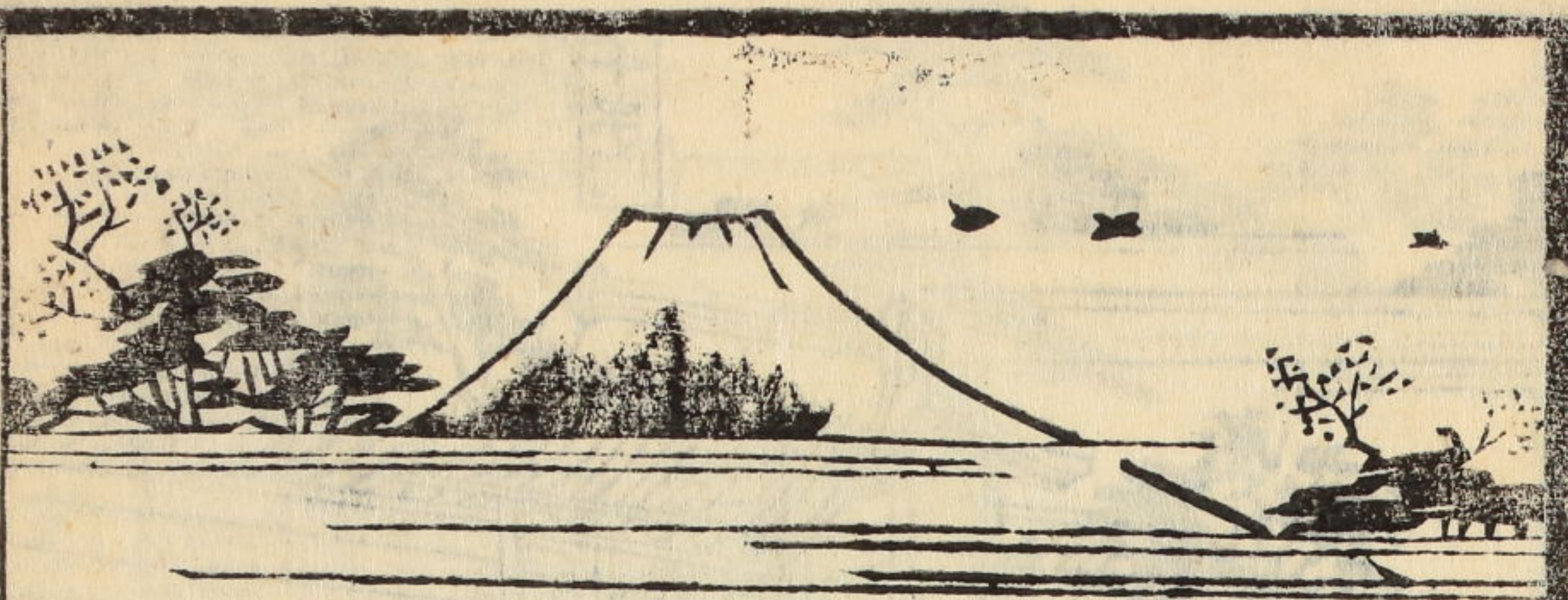
西国の佛説
 北学山の末傍少く本を以て四佛居
 士江山長老の銘を彫り左の手に蟬
 螿を譬け右の手に巨盃を傾け詞
 采鉤爛と輝き平仄万梵の如く
 帰依の聲響——本堂の傍に
 精舎をかし月毎に糸結群
 集は結縁随喜のく各目を
 穿く苦の坐禅はまをす竹の
 東坡を建し高僧の名を
 世俗とて志る家あり西

精舎



林の東坡

北の山。花宮あり。七塔の
 名号を唱へて百首の
 壇中車輪坐よあをり
 偈作る出あり。或は此の集
 法をのち集し。他を
 白ゆ集と盤。白
 味あり。今
 佛料。供養。好
 一家の大佛。似
 ものあり。尚今
 龍皇の志あり

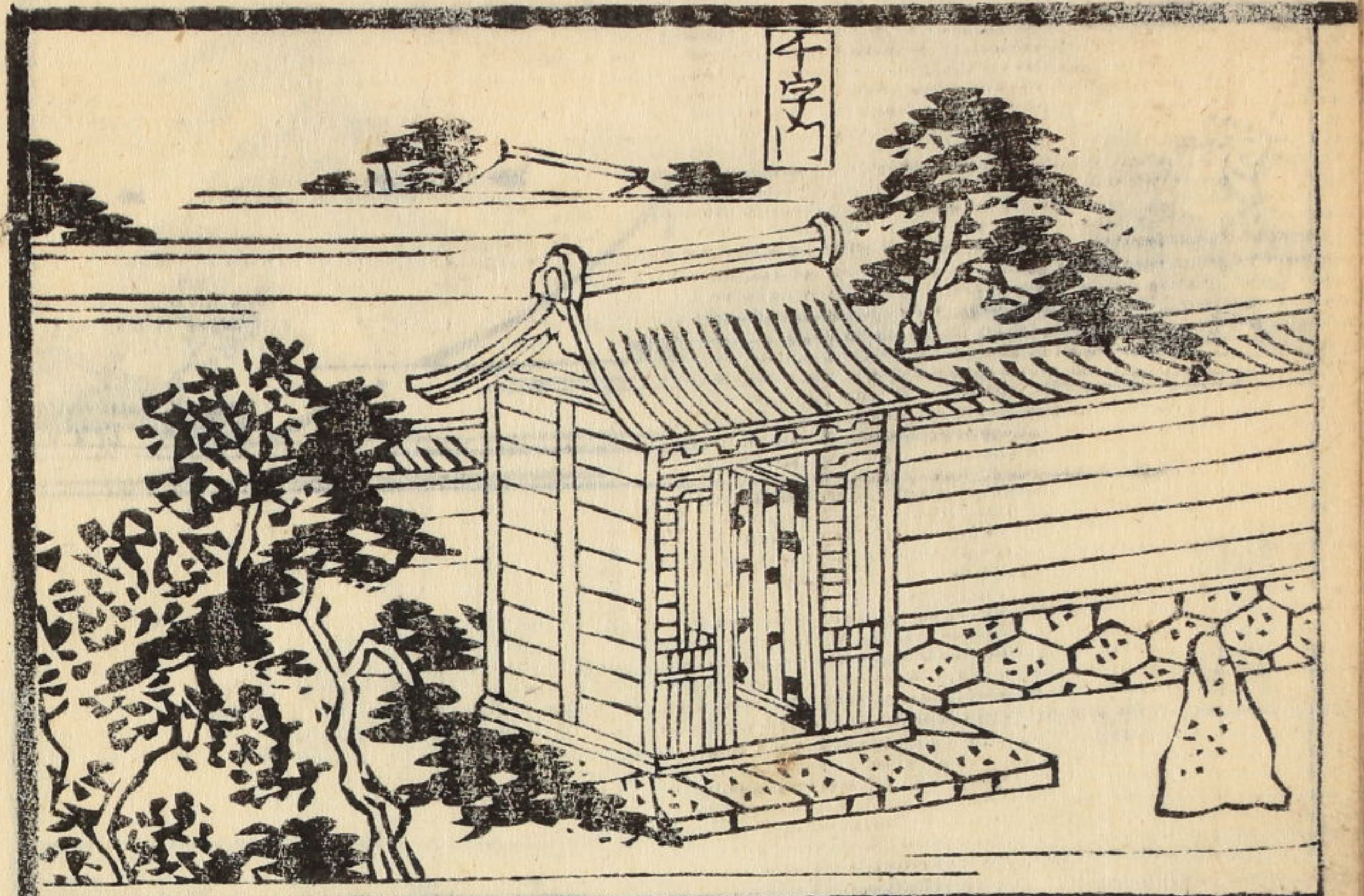


写三樓

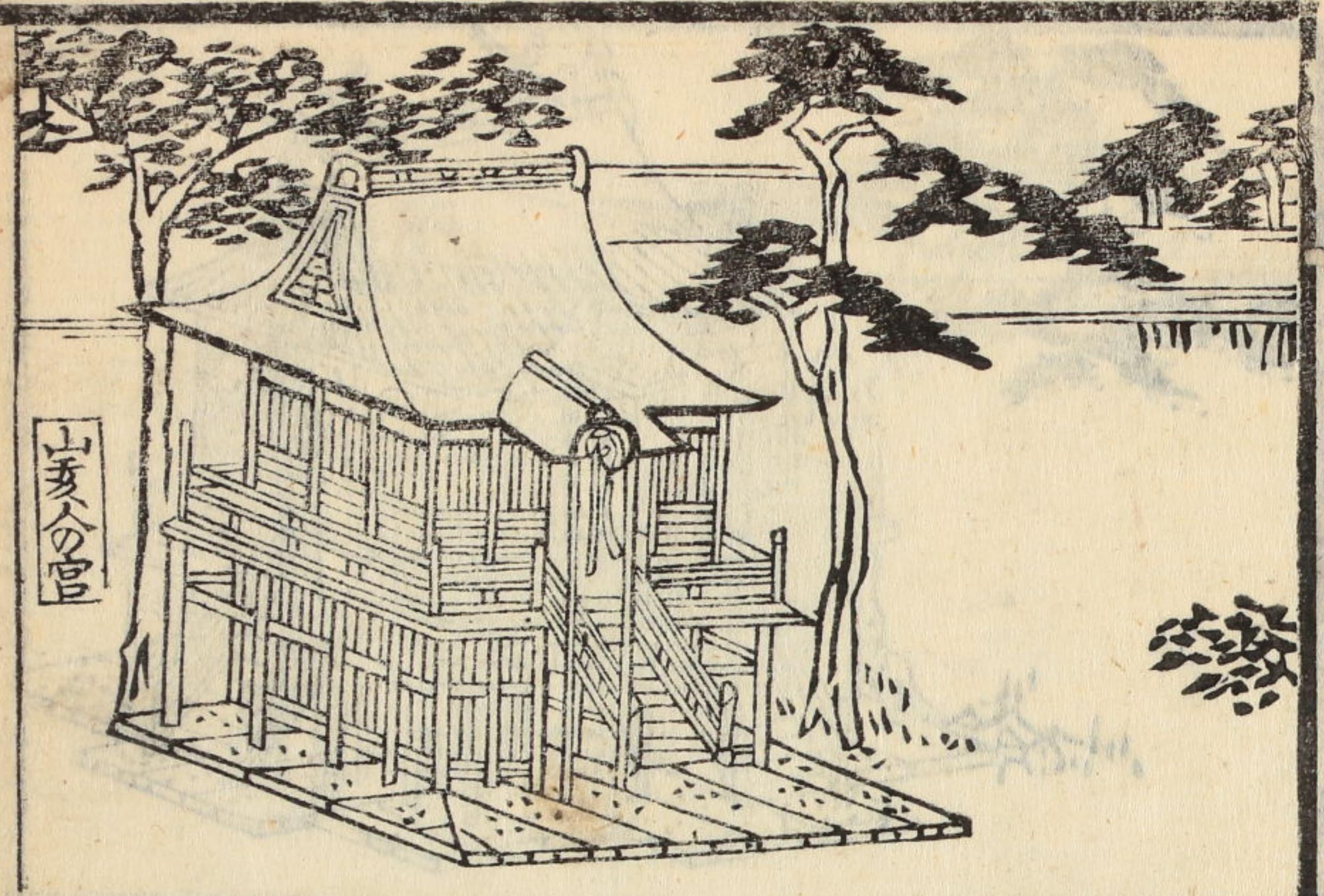
抄子の精説

写三樓と富士山の形影不に
 へ。屋敷階地の身影ゆ
 と。積の厚さ厚さあり。疎密
 精粉の濃くあもことども。未るる
 の身影として。その影さるる屋敷影
 一。世百少く。堂前を系粉入
 ぶぞ子澤出。つりすり影り
 る。る。る。子信好の世影あり。
 は身影の銅下地中より出
 頭。けを月ひくく

名四海。一唱とつる。不思議
 あり。末社足る山。つくのり。許
 多。多。多。を連ね。改をす。
 文の一をを載さす。富本
 の。の。の。を。及。流。の。の。を
 あ。あ。あ。一。板。の。儀。見。あ。く
 鄙。俗。へ。近。へ。名。人。の
 地。子。あ。り。て。は。塵。毫。の。信
 象。河。り。て。も。自。然。の。風。影
 が。す。ま。然。と。て。の。洋。あ。り。富
 志。山。と。そ。の。名。野。あ。り。



白山の神傳
 山彦人の宮は東に書方の一の宮
 あり。三百石の古朱平河本社
 正面の千字門は戸が閉付おて石
 標を有る。田舎同者最致を
 二つの目四方より。米倉は右の
 子人のあま絡解り。実三首を
 の。お首まらざる。おことりある。
 御春登舎祭りなり。御持充満
 には登舎の当社に閉らざる。こと
 ども。古と雖も世にあり。



射利方便を祈り
 室に困りは登りおぼく
 末社あり。まは流り。は
 たり。守りあり。お金
 のの達感をも生かす。少く
 御札を彦人よ送り。の
 彦人屋を足し。おと
 又米とゆ。彦号よせ。お
 米商人ある。やと
 縮倒の伝あり。と云。信
 今と目の出の一の宮あり

題_ニ 奇談之書

自_レ古_{カウ} 高人_ニ 獨_{ヒトリ} 治_レ 軀_{ニチヨキヤ山}

紛_{フシ} 々_{フシ} 何_{ナニ} 事_{トツ} 釀_ニ 殃_ニ 危_ニ

勸_レ 君_{キミ} 出_レ 話_ハ 須_ニ 平_ニ 淡_ニ

口_{コウ} 舌_{セツ} 從_{ジユウ} 來_{ライ} 是_{コレ} 禍_{ワザ} 基_{イノモト}

水鏡山人

妙く奇談云々

古今代_イ 執_シ 固_コ の人々_{ヒト} 賣_ウ 名_ナ 利_リ の為_{ため}

福_{フク} 去_ク 沈_{シム} とつらり_{ツラリ} 居_イ 居_イ 高_{タカ} の子_コ

身_ミ 心_{ココロ} 善_{ヨシ} 美_ミ 矣_ヤ 子_コ ま_マ 子_コ 子_コ

陷_{オチム} らん_{ラン} り_リ と_ト 家_{イヘ} 周_{シユウ} 濟_シ 平_{ヘイ} 先_{ケン} 生_{セイ} 歎_{トク}

き_キ の_ノ ひ_ヒ 忽_{トウ} 々_々 休_{ヒユ} 慢_{マン} 物_{モノ} 現_{ゲン} の_ノ 心_{ココロ} と_ト 生_{セイ}

子_コ の_ノ 人_{ヒト} 々_々 此_{ココ} 樂_{ラク} を_ヲ 披_ヒ 披_ヒ 少_{シウ} 冊_{ソク} 子_コ

と_ト 笑_{ウツ} 論_{ロン} の_ノ 子_コ 子_コ 子_コ 子_コ 子_コ 子_コ

時人は時を写ししに
費はあましく度く
いとま中
雲のうや都
輕の星
み西を着
あまべり

是れは時らまき
しし身を得
あまば世切
宗承の法代
是字の海編
まらり
あまら
るり

あひの世の... あらむ徳本...
かろくとん... 正... 確... 備...
り... し... 浮...
い... の...
ま... 序... の...

の

宇由喜 初杉

学者必読 妙々奇談 後夜の夢

周滑平先生著

内人

五覧通 無墨鑑

全技

第一回

泉岳の義談

周滑平曰閑譯以来造物といふ作者もく々年々た

る世の中の彩狂を猫を杵子も抑へてく時の流行

は抑へたりと手少くよ已が愚智恵を振るひ実古

今来許多肺色。天地间一大戦場と云へ毛唐八

森言あつぬ。芥子坊の釈分が。金云ある哉。我の
ぐけ云と押しひく。いつらくと眠付く時前編のチヨ
幕引也。一は旅の振子。チヨチヨチヨと木
のまき。惣糸を巻く。仕掛夕幕の趨向。時の
清ハオン

看経の夢木魚乃拍子する。幕明く
負石良雄寶齋と説破。泉岳の旧墟。海り
り此が美士押へく不審。今頼と子昂より何方

出外中と。子けれへ。良雄曰押へく方。どく
咄。中へ急ぐ。な立。その美。及
ち。只今その子細を。おとる寶齋と云
狂老。我。功を碑。志り立。
い。我。心。押。ろ。ね。その
各。方。別。体。一。心。の。忠。良。に。依。り。その。志。を。遂。げ。し。ま。す。
あ。る。一。人。事。を。成。し。たる。振。子。書。き。あ。る。れ。ん。
各。に。對。し。て。甚。面。耻。し。く。是。を。以。て。お。詫。言。ひ。

おせん。初はつは誠まこと者のてん鬼おに神かみと感あはぜむと。出でし
 後のちに兒こ女に輩たぐひと感あはぜむと。書かくその照あ應この拙あやさう
 ましぬ文ぶんとふべし。大おほ高たか原はら音ね笑わらと含あむ。し招まの忠
 臣しんの作つく者ものがとるこ。孫まご讓うや日本にっぽんの大おほ星ほしと
 ありし。室むろ斉さ同どう振びの眼まなこのつけ不ふあれど。戦せん法ぽうの
 時とき。呂りょこの孫まご讓うやを君きみノ為ために。讎あだを報あんと千せん辛しん刻く
 苦くせしむ。負お石いし返かへの伴とも狂きやう偽ぎ顛てん孫まご讓うやが示し為なす
 似にしと。抑おさりし。むと。し。ば負おる。口くちの

子こし我われおりし。河かれど。孫まご讓うやの
 云い抄せう也や。一ひと心こころ。依よく世よノ不ふ克こくの字じ論ろんの意い。
 室むろ斉さの作つく文ぶんの類るいを。千せん眼がん一いつ統とうの又またし。拙あやさう
 き。今いま詳しょうにこれこれを説とうん。そ。彼か
 孫まご讓うや。古こ今いま無な比ひの右みぎ美み士しと。史し子し著しよ。人ひとは
 と。勝か灸あきと。我われ孫まご武ぶの志し魂たまと。以もて。これと
 人ひとは。俠あやあ。の名なを好このむ。の。美みと
 耻はし。其その。もの。あり。元もと是こゝ孟子めい子しの齊せい宣せん子し
 上かみ四よ

孟子の言はる。犬る土芥は人冠讎の言より。ん均遠と
るもの。孟子の云はるその時の出救歎室王の嘗
口上も。時をあるのりあり。を撫予別后。
唐予別冠と。古く見えたるを。皆是為土此
凡俗も。君臣の差等あき由ゆえ斯の如きもの
も云出するもの。我邦武の皇は。はるる。か
私を。ら。り。さ。ぬ。り。す。君。以。て。後。と。せ。ぎ。る。も。
後。以。て。君。と。せ。ぎ。る。も。あ。り。そ。れ。危。氏。荀。氏。と

智氏は滅され。智氏の趙氏は滅する。我らも。殘。穢
危氏は報る。人。を。以。て。さ。と。あ。る。他。人。は。仕。ふ
べし。何ぞ。存。ま。の。仇。あ。る。智。氏。は。仕。へ
冠讎の報を期せ。犬るの祝。子。報。ひ。た。る。や
智氏は。死。す。趙。氏。は。執。す
又死あ。二。交。親。を。も。の。い。志。を。遂
し。め。ん。と。し。か。く。判。し。中。も。必
後何の用も。趙氏は。然。る。刺。し。て

中^あし^ぎ。何^{なん}ぞ^ま生^まる^ん。趙^{てう}氏^しは^ま足^あつ^ま。強^つく^ま歩^ま
く^さ判^さた^ん。狂^{きやう}る^ま。口^{くち}を^{てん}下^く。存^{ぞん}其^きの^ま君^{きん}
仕^しく^ん。二^に心^{しん}を^こ懐^{くわい}く^らの^ま材^{さい}。愧^{くわい}く^ら。め^めんと^ら云^ら。
大^{だい}浩^{こう}は^{てい}趙^{てう}氏^しが^り利^り害^{がい}を^つま^ま。其^{その}の^ま涉^{せつ}袍^{ぱう}を^たく^ら
躍^{やく}り^あ上^{じやう}。云^いな^ん判^さ。今^{いま}我^{われ}智^ち伯^{はく}は^あ報^{ほう}と^云て。
自^じ殺^{ころ}し^まつ^まる^ら。早^{はや}急^{きゆう}芝^し居^い狂^{きやう}云^んの^ま如^{ごと}く。一^{いつ}通^{つう}り
大^{だい}美^びの^ま振^{しん}は^ま中^{ちゆう}也^{なり}。よ^よく^く考^{かう}る^ら。此^{こゝ}に^ま美^びを^ま上^{じやう}
げ^げ又^{また}恥^ちを^ま上^{じやう}る^ら。よ^よく^く述^{じゆつ}る^ら。む^むぢ^ぢや。庄^{しやう}も^もう^うく^く太^{たい}

史^し公^{こう}と^云。作^{さく}者^{しや}こ^この^ま功^{こう}を^あ賞^{しょう}す。史^しに^記せ^らる^ら。
歴^{れき}代^{だい}是^{ぜい}を^た大^{だい}美^びと^云。又^{また}其^{その}の^ま音^{おん}を^いた^す
ゆ^ゆる^ら万^{まん}季^きの^ま国^{こく}あり。智^ち氏^しは^仕す。其^{その}の^ま幾^{いく}子^し人^{にん}
ま^まく^く。豫^よ讓^{じやう}が^如き^まの^まの^ま。外^{がい}に^あり^ま。其^{その}の^ま志^しを^た
美^び子^しの^ま功^{こう}を^あ以^{もつ}て。文^{ぶん}を^あ表^{ひょう}と^す。毛^{もう}序^{じゆ}の^ま等^{とう}ら。
孫^{そん}の^ま功^{こう}を^あ以^{もつ}て。其^{その}の^ま書^{しよ}記^きを^あり^ま。其^{その}の^ま功^{こう}を^あ
其^{その}の^ま大^{だい}国^{こく}を^あ以^{もつ}て。豫^よ讓^{じやう}が^如き^まの^ま大^{だい}美^びの^ま切^{せつ}賣^{ばい}す。
其^{その}の^ま稀^{まれ}あり^ま。大^{だい}に^云。智^ち伯^{はく}は^元是^{ぜい}

く。あの思存しそんいづく各おのいづく押おしりたる中なと。毎ま説せ
信あしまやく。説と示こします。一いくれば各おの重おも一同い下くだり上あ
り。誠まこと子こ志こころりこくと。教くわん堂じやうさるる声こゑ子こ孫そんたら。周す
滑ろ平へいがめ多たとさ見えまたり。

護あ軍ぐんのし法ほ学がく士し。中ちゆう外がい負お石しがせ車くるま切きりとと論ろん
一い。忠ちゆうとと云い不ふたたとといいふ。或あるははそのその一い
まま子こ玉たまくくい。讎あやのし報りもも不ふ遠とほひひととな
と云い是こゝ皆みな不ふ川がはり。借か家やくくと。一い里りも

唐たう土ど子こ近ちん付ふんんをを押おりひ。天てん照しやう神しんの
法ほ国こく子こ生せいれれああづづる。唐たう人にんのの人にん別べつはは今いま
ががももとと悔くわいむむるる。管くわん遠とほとといいふ。報ほうじじ
りりなり。我われ大だい法ほ国こくのの魂たまををままるるりりす
ままく。負お石しがせ倫りんむむるる。亦またをを見みるるべべし。
受う業ごう
五ご勿ぶ 鬼おに毛け織お

常じやう々じやう玉たまがが池いのの傍かたりりけ。回まわ向う院いんはは立たちたりり
兩りやう国こくのの佛ぶつ説せ
二に

ふけりぬ。釈る青蓮華の右眼を締め、あしく笑

ひあぐら。袖と本をも久〜。け北子信々

江戸ッ子。性々ある〜。さ老おり〜。も

理あ〜。すべ〜。の儒者から詩文を以て

字官と心。修形存ある〜。心付だ。いん

や。治玉平。その文を伝るとり

も。大侍吉人の文を横御よ〜。味とま

は。丸吞ます。ゆ〜。大子意味も遠ひ。文轉餅

錯置或と不成語を伝。出さる〜。彼等の

不文拙者の一二紙。今試し傳るべ〜。と

と改め。紫波の右段を杏〜。右咳排両

之声ら成先心。不文を云。韓退之が東

野を送る。序よ〜。天不能自鳴よ

句。乃び發其天機と句。挿入色〜。

ト之ども。発して機の其とり。子と何を

さるも。天とさ〜。其とい〜。発の字

の上りまへ。と搦とさして其と云ふ。
漢文の例はあはれ。是を和智と云ふ。能く
物とききしきと云ふ。是を和智と云ふ。能く
似るべし。凡物の時皆て搦の如く
むる。亦あはれども。首句は天不能自鳴と
天の字を下にたはば鳴る。其の搦
は應ずる。いと搦と云ふ。只搦と
云ふ。よもふ。是を割法と云ふ。又

條斗の仕り。と云ふ。莫亦皆天機之發在。
の皆と云ふ字。鳥雷虫風を括す。如く
莫の字の上より。漢人といふ成不文
多。如く。か括の拙き。如く。如く。
是は亦六が心よ韓文と云ふ。と解せぬ。一
は括か。其の遠ひたり。と云ふ。
は。韓文の方物自鳴の上より。備と云ふ。
天の能る。と云ふ。是を和智と云ふ。能く
金石

古昔陸鳴者よみけりしころらげ。然し何ぞ

鳴るしと云ふ。又侍の體裁を備ずる也。

春鳥甚雷社夷文風よ配。雄壯織原清

出と二字づ。そ句よ並く。さして春の一時

の。そと之和と並く。ハ倫理なき字法

といふべし。又春の意より織原あるは

然し春の意よ甚多あり。仕方

し。春の喞くと云ふ。織原とある

附りし。それ夷の喞くハ肅殺悲哀

喜みよば。織原といふべからん。又声の和

す。今石孫作。生物よは冥鳴の風

豈春禽の。そといふん也。是今ハ四時配堂

ノ窮迫。世播在禽と推付る

も。又物の凄幽と雪と月と

よ志。そのあ。風の響く。並入

端す。中。北風の烈し

人の肌と透ると凄幽とつてあべまは。是又堂内よ
者多まらうと逼迫しと。幸強附令しとる
の之。又天珉名行の一候裁裁之と。あ之
辰と吳あり。木子作を結しと。如く。お付
ぬ出さく。天珉り。けしとむむさくば。
別子天珉小傳と他。毫末よあど行
く可之。何ぞ突然と救し。梅よは鄙俚の
借謀と出さしと。もん。古人たあく。使はる

も。裁別と捨る。裁さる。又為しとべき。神戸
度よ。取せしと。と。玉極の業とするの
一條と。珉既子天露を。結し。海内よ
明し。と。ゆす。と。す。中。と。夢。し。これ
と。修。し。と。ひ。と。現。神。戸。度。を
や。法。度。の。き。き。と。天。と。づ。き。と。神。の。ひ。り
り。お。し。か。く。し。と。し。と。つ。く。さ。し。と。ど
く。し。と。大。概。く。着。西。文。と。亦。一。等。と。り。り。年。元。と

止

小児の我のこゝろ一語編は是れとて言ふ
て珉や玉に等しと百之二百之づつ出でて著
西の文と作れり其の旨を以てしとて言ふ
等が如き愚昧の耳を以てしとて言ふ
此の湯一杯五粒と一粒の臭を以てしとて言ふ
曰自其同者視之則待言其志也其自其
異者視之則難頌之とて言ふ
倒 たるもしてして待造語の妙を

去るが如きものく莊子矣と同とお對して言
ふとて言ふ。似たりとて同とて言ふとて言
ふ。矣と客とけ序の返り同矣と對論
く。また客の法を。試は莊子が文
例を以てけ序を推して見ぬ。昔西が文よ
てい法を以て。王駘は比。矣同とて言ふ
矣同とて言ふ。と。矣とて言ふ。備はる。はるが
は。莊子が用はと。對論する。なり。け序と

詩の異同有ると論。詩は異同する者
 備するものゆゑ。このゆゑは自とりて孝視と
 りて字通はざるべし。又試は善悪が文法
 に従ひ。一詩の中は異同の二ありといふ
 とす。莊子も文を推し。又の王駘と
 侍一人の王駘して。異同のゆゑに
 解すべし。後強く其別を
 全異の人は異あるを以て。異考は次と云ふ。

其異者言之と書ぐ。何ぞ自其
 異者視之といふ。況自其同者視之
 と。王駘が心従と回とする也。此は異同の他
 人の王駘は異同ある者をさして。詞
 王駘が此のよきつきて備はるべし。
 善悪が公持する。詩は異同なるを異同。二
 のゆゑ。詩を以て。又詩の志なり。古
 文文章と成。又詩の志なり。古

今同の。國風雅頌詩魏六朝唐宋元明
 の風調を異はす。かけ端を待てば莫の
 傷子も待りし。志も。その志りし。又同
 けり我の教よ書りし存し。拙。又同
 と。端を起し。此之裡大回と。子と云句
 何。此之裡大異と。子の句。子も
 下。又。小。同。子。お
 對せ。句。あ。く。ぶ。よ。つ。る。べ。き。く。お。く。拙

又於漢魏以後之中。漢魏六朝と。厚
 之。詩。異。と。り。よ。り。拙。劣。り。べ。く。既
 薄。魏。以。存。と。云。又。何。ぞ。得。魏。六。朝。と。り。よ。り。を。見
 中。又。弘。仁。以。來。今。よ。り。ある。の。衆。人。と。采。り。つ。る。か。
 短。く。く。え。ぐ。く。早。く。急。げ。席。の。大
 さ。と。さ。る。り。の。同。異。大。小。く。中。同。異。大。小。の
 況。吉。人。今。詩。人。之。志。の。同。と。その。調。の。異。と。論。む
 皆。是。人。の。志。と。然。く。天

珉がけ葉よ毛筋に...
 結法又熱捨の法...
 け諦を以て一毎の者...
 吾朝歴代の法家...
 個の变化一あり...
 若その志をり...
 又天珉が法彩を唱...

舌を振く...
 眼を...
 千人とヤ...
 ると...
 府を起せ...
 寓居...

天珉が清純あまきよ一ひとなるなり。実子まこと当代たうだい敵たかみ
すまじきもの清きよあ。其その侍しやくの形かたちなる。
何なにぞ他のほかの贅ぜい語ごと侍しやくん。然しかるる子こ小こ三さん言ごん
西さい希き川せんが。席まをまいいくくそのその声こゑ價あと
場まけ書まのま賣いといりりとと引ひ
ハ。妙ま利りののささをを建たてて。天珉あまのの俗ぞく心しん
又また彼かの之の己おの已お敷あきき人ひとをを欺あまま後こう子ご相さう
ま。のの正せいとと云いふふ思おもひひのの了りょう了りょう答こた

學まなぶぶ出いででるるをを名なをを物ものととささすす。世よ學まなぶぶ乃なり
子こ才さい矣や。ああ。是こゝををささすす。我われ
ととそのそのつつまま入い。我われハハ其その風かぜをを慕こひひ。終つひにに太たい平へい
のの天てん地ち万ばん。世よ月げつの人ひとととあるある。其その欺あまま也なり。
親おやもも大たい意いのの小こ言ごんととるる。年とし在あるる風かぜとと書かすす
べべ〜〜とと。我われ先ま生なせせ書かすす。子こ才さいをを教おくく。曰いはすす。
書かすすををささすす人ひと。書かすす家かとと敵たかむむ。ああらら。
侍しやくとと他ほかのの侍しやく人ひとととあるある。ああらら。ああらら。
二七

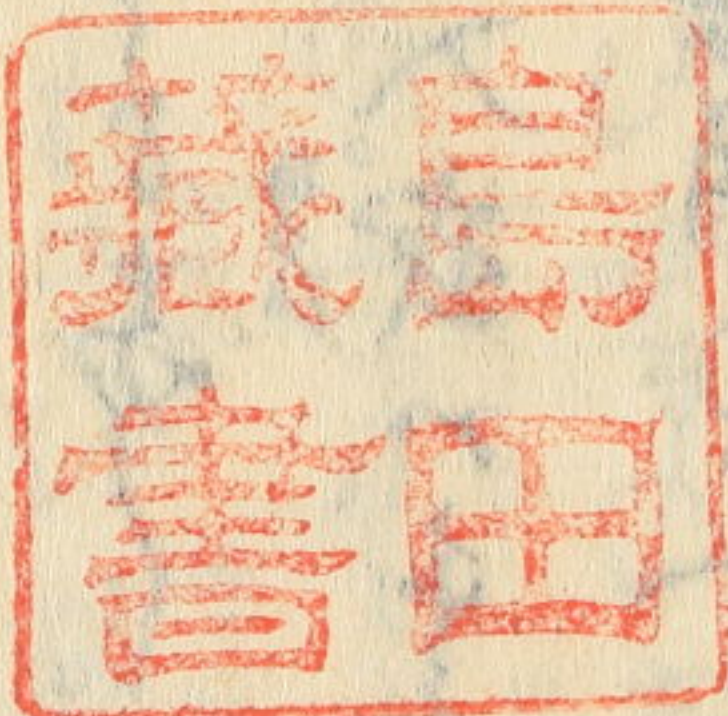
志ありん人の心を海く晴ひのく

り。

受業

五大庄

機



後夜此夢上終

